

スーパーチューズデー 民主党支持者の審判

サンダース候補有利の予測を覆して大勝した
バイデン候補。支持を獲得するに至るまでは、
民主党支持者の、候補者選びの「悩み」がある。
結局、「トランプに對抗できるか」がキーとなった。

今年一一月の米大統領選でトランプ大統領（共和党）と戦う野党・民主党の候補選びは、予備選が集中した三月三日の「スーパーチューズデー」の後、穏健派のジョー・バイデン前副大統領（七七）と急進左派のバーニー・サンダース上院議員（七八）との一騎打ちとなる構図が固まった。候補が乱立する状態だった指名争いは、二月二十九日の南部サウスカロライナ州予備選でバイデン氏が大勝を収め、急展開した。その背景には、序盤戦で勢いづいたサンダース氏の指名獲得シナリオが現実味を帯び、民主党内に危機感が広がったことがあった。これまでの候補指名争いを振り返り、今後の展望を探ってみたい。

民主党の大統領候補の指名獲得に名乗りを上げた人たちを集めた最初のテレビ討論会が開かれたのは、昨年

毎日新聞北米総局長

古本陽荘

ふるもと ようそう 一九六九年生まれ。上智大学卒、米カンザス大学大学院修士課程（政治学）修了。横浜支局、政治部、ワシントン特派員などを経て、政治部、外信部で副部長（デスク）を務める。二〇一八年から現職。

（二〇一九年）六月だった。この際の参加者は二〇人と多く、討論会は二日に分けて行われた。これが今年二月三日の中西部アイオワ州党員集会が開催された時点での立候補者は二人。実際には、上位の五人と、序盤四州への参加は見送り、スーパーチューズデーからの参戦を表明していたマイケル・ブルームバーグ前ニューヨーク市長（七八）を入れた六人の争いとなった。

「サンダース氏指名」への危機感

当初から「本命」と指摘する声があったのはバイデン氏だった。上院議員から、オバマ政権の副大統領に就任。二期八年務め、知名度は高く、一九年中は、ほとんどの世論調査で支持率トップを維持していた。ただ、選挙戦が本格

化していない段階での支持率は、「知名度が高い」以上に意味がないことがある。有権者が真剣に考えていないためだ。実際には、バイデン氏に挑戦する候補たちに順番にブームが起きては、熱が冷めるということが繰り返された。

最初に注目を浴びたのは昨年六月の最初の討論会で、バイデン氏の過去の人種問題に関する取り組みの姿勢をただしたカマラ・ハリス上院議員（五五）だった。ただ、脚光を浴びたのはこの時だけで、急上昇した支持率はすぐに落下了した。急進左派のエリザベス・ウォーレン上院議員（七〇）は他候補に先駆けて、公約を次々と発表。ハーバード大ロースクールなどで教授を務めていた経歴とともに、政策通の候補として認識されるようになり、徐々に支持率が上がった。「アイ・ハブ・ア・プラン（私にはいい案がある）」が合言葉で、ありとあらゆる分野で政策を立案しているとアピールした。集会が終わると、希望者との「セルフ・タイム」を長時間設け、ウォーレン氏と一緒に撮った写真がソーシャルメディアで拡散し、話題にもなった。短期間だったが昨秋には一部の世論調査で首位に立った。だが、予備選が近づき、サンダース氏が復調傾向を示すと反比例するように支持率が下がっていった。

初戦のアイオワ党員集会に人やカネを集中投下し、強固

な組織を作り上げていたピート・ブティージェッジ前インディアナ州サウスベンド市長（三八）は、アイオワで支持率が徐々に上がり、党員集会前の支持率でトップとなる調査もあった。集会には大勢の人が集まり、オバマ大統領がアイオワで勝利し、全米的勢いにつなげた選挙戦略を再現しているとの見方もあった。だが、政治への関心がきわめて高く、白人の多いアイオワと第二戦の東部ニューハンプシャー州予備選の序盤二州を超えた広がり、その後見せることはなかった。

民主党支持者らは、候補を次々と吟味し続けたが「合格」を出せず、ずっと迷ってきた。そして、最後はまたバイデン氏を穏健派の代表候補として認める道を選んだ。それを後押ししたのは、サンダース氏の躍進だ。

民主党の候補指名争いは、各州からの代表である代議員の数を競い合う。代議員は州ごとに比例配分され、いずれかの候補が過半数を獲得すれば、七月の党全国大会で指名を得る仕組みだ。アイオワ党員集会の暫定結果は、代議員の獲得割合ではブティージェッジ氏を勝者としているが、投票数（実際には党員集会なので意思表示した有権者の数）では、サンダース氏がトップだった。二戦目のニューハンプシャーでも、ブティージェッジ氏の追い上げをかわし、サ

ンダース氏が勝利。そして、三戦目の西部ネバダ州党員集会では、代議員の獲得割合四六・八%で他候補を引き離して圧勝。さらに、目前に迫ったスーパースターズデーでも多い代議員、四一五人を選ぶ西部カリフォルニア州、次いで多い、代議員二二八人の南部テキサス州の事前の世論調査では、いずれもサンダース氏が優勢と伝えられていた。特にカリフォルニアでは、首位のサンダース氏以外の候補が支持を分け合う可能性があった。世論調査によっては、二位以下の候補がすべて一五%未満にとどまった。党の規定により、代議員を獲得できるのは一五%以上の得票者とされており、この調査の結果通りならば、四一五人の全代議員をサンダース氏が得る計算だった。

穏健派の候補を一本化できないため票が分散し、サンダース氏を有利にしているのは疑いようもなく、「スーパースターズデーの前に手を打たないと手遅れになる」という声が上がりはじめた。まず、悲鳴を上げたのは下院議員だった。二〇一八年中間選挙で勝利し、下院では民主党が多数党だが、トランプ氏の支持が高い選挙区を勝ち抜いた穏健派の民主党議員は少なくない。民主的社会主義 (Democratic Socialism) への支持を明確に表明し、政府主導の国民皆保険を導入するため医療保険会社を制度の根

幹から排除すると公言しているサンダース氏が党の候補となることへの危機感が露骨に表明された。「誤った候補を指名することになれば、民主党議員の大虐殺になる」(セドリック・リッチモンド下院議員)、「上院を奪還する可能性もなくなる」(ディナ・タイタス下院議員)などとサンダース氏の指名獲得を警戒する声が上がった。こうした党内の危機感の高まりのなかで、サウスカロライナ予備選が実施された。

バイデン氏を復活させた政治環境

バイデン氏の大統領選への挑戦は三度目である。いずれも早期に撤退を余儀なくされている。今回も「本命」と見る声があるにもかかわらず選挙の運営がうまくいかず、選挙資金でも他候補に及ばない局面が続いていた。そして、アイオワで四位、ニューハンプシャーで五位という想定以上の惨敗に、選挙戦継続は困難との見方が広がった。

ニューハンプシャー予備選の開票日には結果を待たず、サウスカロライナに向かった。黒人有権者が約六割の同州で勝利すれば、黒人の多い南部や都市部での勝利につながり、一気に挽回に向けた弾みをつけられると計画、実際にその通りとなった。バイデン氏は、もともとサウスカロラ

イナの黒人社会との交流があり、休暇を同州で過ごすことも多かった。そして、サウスカロライナの黒人社会で圧倒的な影響力を持つ民主党下院序列三位の院内幹事、ジム・クライバーン下院議員はバイデン氏の親しい友人だった。

ワシントン・ポスト紙によると、バイデン氏はネバダ党員集会の翌日の二月二三日、サウスカロライナでクライバーン氏と会談。クライバーン氏は「話の的を絞った方がいい。家族の話をしろ」などと進言。そして、サウスカロライナでテレビ討論会があった二五日の翌日に、まだ公の場では表明していなかったバイデン氏への支持表明をメディアの前で行う段取りなどが話し合われた。クライバーン氏は支持表明で「この国の将来を考えると怖くなる。米国は岐路にある」とし、米国の尊厳を取り戻すためにバイデン氏が必要だと訴えた。サウスカロライナでバイデン氏は圧勝したが、出口調査で四七%の有権者が「クライバーン氏の支持が影響した」と回答しており、この支持表明が地元でいかに大きかったかを物語っている。

そして、サウスカロライナでの圧勝と「サンダース氏指名獲得」阻止を求める声の高まりが重なった状態でスーパーチューズデーを迎えた。プティージェッジ氏とエイミー・クロブシャー上院議員（五九）はスーパーチューズデー前

に選挙戦からの撤退とバイデン氏への支持を表明。各州の現・元議員らからまるで連鎖反応のように支持が表明された。これまで見られなかったバイデン氏のモメンタム（勢い）が加速し、スーパーチューズデーの一四州のうち一〇州で勝利。サンダース氏が勝利するとみられていたテキサスも制し、カリフォルニアでもサンダース氏の圧勝を阻止し、開票率八九%段階で約七ポイント差で二位となり、代議員を分け合う結果となった。

また、低迷していたバイデン氏に代わる穏健派代表の座を狙っていたブルームバーグ氏もスーパーチューズデーの翌日に撤退を発表し、バイデン氏を支援してトランプ氏再選阻止を目指す考えを表明。急進左派のサンダース氏と穏健派のバイデン氏のどちらを選ぶかが、残りの州の選択となった。

サンダース氏は、スーパーチューズデーで圧倒的な代議員の数を確保し、その勢いで指名を獲得する戦略だったが、大票田のカリフォルニア・テキサスで大勝して他候補の追隨を振り切る戦略が破綻し、選挙戦の立て直しを迫られている。

バイデン氏に勢いがあることに加え、これから予備選・党員集会が実施される州を分析した場合、バイデン氏に有

利な州が多いという見方が多い。また、接戦が続く、どちらも過半数に到達しなかった場合、投票先が決まっている各州の代議員が形式的な投票を行った後、決選投票が実施される。この際には、特別代議員（スーパードリゲート）と呼ばれる連邦議員や党幹部が参加することになる。サンダース氏を支持する特別代議員の数はかなり少数になる見通しで、決選投票になれば、バイデン氏の指名獲得はほぼ確実だ。

メッセージは「トランプ再選阻止」

選挙集会でバイデン氏は、「もしトランプ政権が八年間続いたら、この国の品格はまったく変わってしまう」と訴える。トランプ大統領の誕生により、米国が失った信頼や威厳が回復できるかどうかの瀬戸際にあるという主張だ。政策では、気候変動対策のパリ協定への復帰や、オバマ政権による医療保険制度の改善に重点が置かれている。例えて言うなら、「脱線してしまった電車を再び線路に乗せることが私には可能だ」というのが訴えの柱で、目新しい政策を掲げているわけではない。未来に向けたビジョンを競い合うのが選挙の本来の姿であるとすれば、物足りないメッセージであることは疑いようがない。

だが、「トランプ氏の再選を許してはならない」というバイデン氏のメッセージは、民主党の支持者にとつて必ずしも的外れとはいえない。選挙戦の取材で各地を訪れ、民主党の支持者と話した限り、トランプ再選を食い止めなければならぬという強い危機感を感じた。ブティジェツジ氏の集会で会った医療器具会社経営の女性（六二）は「普通の米国人にトランプ氏が与えた不安を考えたら、あと四年などともんでもない。彼は米国を象徴する人物ではない」と語った。多くの有権者が、「トランプ氏に勝てる候補は誰か」が判断基準だと明言した。ただ、明確な判断基準はどこにもない。候補を真剣に見極めたが、なかなか最適な候補が見つからない。その結果、ある候補のブームが起きれば次の候補に移動する、という不安定な状況が続いた。それらが一巡した後、もともと有力と考えられてきたバイデン氏が、無難な「勝てる候補」という結論に傾いたというのが、取材現場で感じた実態だ。

見えてきた「バイデン連合」の姿

バイデン氏を押し上げたサウスカロライナは、周辺の南部の州にメッセージを送った。「黒人有権者の信頼に足る候補」というメッセージだ。黒人社会の動向に詳しいサウ

スカロライナ大のトッド・ショー准教授（政治学）は、「結局はよく知っている人物に票を投じる」という黒人有権者の「現実主義」も作用したと語る。サウスカロライナの後、スーパージュズデーでは、アラバマ、アーカンソー、ノースカロライナという黒人人口の多い南部州で圧倒的な強さを見せた。黒人有権者の支持が重要なのは、民主党の支持基盤であり、予備選を優位に戦えるというだけではなく、トランプ氏との本選でも重要になるからだ。

前回同様に今回も接戦となる見込みの東部ペンシルベニア、中西部ミシガン、ウィスコンシンは、前回は何れも得票率の差が一ポイント未満の僅差でトランプ氏が勝利している。これら三州の都市部に集中する黒人有権者の投票率が上がれば、逆に民主党側に有利になると考えられている。

さらに、これまでの予備選では、バイデン氏は大学を卒業していない労働者階級の支持を得ていることも明確になってきた。スーパージュズデーが実施された州の米メディアの共同出口調査によると、大学を卒業していない人の支持はバイデン氏が三八%で、サンダース氏の三三%を上回っていた。サンダース氏は労働者の庇護者と主張してきたが、浸透しきれていないことが浮き彫りになった。トランプ氏は、二〇一六年大統領選挙でラストベルト（錆び

付いた工業地帯）の民主党を支持していた白人労働者を取り込み勝利したが、今回の選挙でもこの層の争奪戦が繰り上げられることが予想される。

「トランプ再選阻止」のためのバイデン連合は、黒人と白人労働者を基盤に、一八年中間選挙でトランプ氏に拒否反応を示した都市郊外の高学歴女性らを取り込む形で拡大するものとみられる。

一方で、サンダース氏を支持する若者層の取り込みは難航が予想される。他候補の支持者とは異なり、サンダース氏の支持者は彼の革新的な提案や政治姿勢に共鳴しており、必ずしも他の民主党候補を支持するかは明確ではないためだ。サンダース氏は、自分が指名を得ない場合でも、指名された候補を支援すると明言しているが、一方で、バイデン氏への相次いだ支持表明を「エスタブリッシュメントによるサンダースつぶし」と受け止めており、支持者らのバイデン陣営に対する非難や誹謗中傷が今後、激しさを増すおそれがある。

今後はバイデン氏が優位に戦いを進めるものとみられる。しかし、流れが何度も急変してきた指名争いだけに、七月の党全国大会まで、さらにいくつものドラマが生まれてもおかしくない。●